

停年退職教授紹介

西尾光雄教授の思ひ出

水 谷 静 夫

西尾先生は、本学が大学院を創設するに際してお招きした教授なので、在職期間はさして長かったと言へないが、我々日文のスタッフや学生に様々の感銘を残された。先生の略年譜などは『日本文学』51号（1979）に載っているから、こゝでは主に思ひ出の形で蕪辞を連ねさせて戴かう。

小文の柱に私は「停年」といふ文字遣ひをした。先生御自身は、多分、

もう皆さん、定メル年とお書きになるから、どちらでもよございますが、以前は停メル年と書きましたなァ。

と仰しゃるであらう。字面では口調が伝はらないが、先生に接した人は、あの見事な東京弁を思ひ起すであらう。それも道理、先生の御宅は江戸幕府以来（かう申して宜しければ《幕臣》の後裔）で、奥様共々生粋の東京人である。お二人とも、崩れを見せぬ齒切れのいい言葉遣ひをなさるには、毎度の事ながら感じ入った。テレビのマグ物などで、私が子供の頃の下町でさへ使はなかった、作り損ひの乱雑なエセ江戸辞がまかり通っている今日、先生の仰しゃり様は実にきはやかであった。時の流れの中では滅び行く美しさに属するものであらうが、地域こそ異なれ日清戦争頃からの東京住まいの家に育った私としては、懐しい限りである。

先生はまた日文の卒業生祝会での挨拶を、

お嬢さんがた、みんないい子になるンだよ。（時には「お嬢ちゃんたち」）

で締め括られる事が間々あった。巣立つ学生は一瞬とまどふ態であったが、この表現など、先生のお人柄あってこそ味のにじみ出るもので、さすがと感心した次第である。

私が先生を存じ上げたのは何時の頃であつたらうか。さだかな記憶は無いが、御著『近代文章論研究』（1951刊）が出版されて間も無くの頃であつたと思ふ。国語学・国文学といふ戸籍の別を言へば、先生は国文学、私は国語学で、所謂専門分野を異にするけれども、先生は国語学的な扱い方を御研究に融合させておいでなので、国語学畑の若僧にもその御労作は親しめた。本学の授業でもかやうな扱い方をなさる事が多かった。時には先生の御講義を国語学特殊講義（特殊研究）に流用させて戴いた。

先生は故久松潜一博士の直系である。久松先生は学識の広さと人柄の温かさとで有名な方であつたが、西尾博士もまたその尊敬なざる恩師と同様、学が古今に及んでをられた。その事は、前掲書に併せ先生の代表作と言へる二つの大冊『日本文学史の研

究 上古篇』及び同じく『中古篇』からも窺へる。

久松先生とのゆかりで言へば、久松先生は晩年、三十近い（小）学会に分れてゐる国文学界をまとめる努力を重ねられ、さうした背景を得て国立国文学研究資料館の実現を見たのであるが、官学・私学を併せたこの運動の過程には様々の厄介な問題があり、これに加へて、国会議員諸侯への陳情とかお役所参りとか、学者先生には不得手な《俗事》もこなさなければならない。久松先生をお助けなさる西尾先生の御尽力は大変なものであった。殊に久松先生なきあと、国文学連絡協議会の事実上の責任者は西尾先生であり、この運営の御苦労ははた目にも大変なものであった。

今先生はやっと、少なくとも形の上ではかうした煩はしさからお退きになる事が出来た。そこで、是非とも日本文学史の中世・近世の篇を世に出されて、先の三著とつないで戴きたいと願ふ。これは先生御自身も勿論お考への事には違ひないが、後学の為に差出たお願いに及ぶ。

先生の達筆は有名であつた。黒板にすらすらとお書きになる字が読めずに困った学生も多かったやうである。悪筆の私などには何とも羨しい限りで、経済学者が金儲け上手といふ保証の無いのと同じく国語・国文の徒だって書は別だと負け惜しみは言ふものの……。先生は学生に就職の為の添へ状をお頼まれになると、巻紙に筆でさらさらと書いてお与へになった。これなど、今後はもう絶えてしまふ事ではあるまいか。

先生のなさり様を拝見してゐてひそかに思ったのは、先生の研究態度に和学の伝統が窺はれるといふ事である。「歌を詠む趣味がありますよ」など一言も仰しやらなかったけれど、古典文芸を研究する者なら、上手下手はともかく、和歌が詠めて当然とするお考へは、お有ちのやうであつた。お許しも得ずに引用すると、「あなたは年寄に恥をかゝせるンですか」とお叱りを蒙りかねないが、

宿にめざめ鶯の声さやけかり伊勢古市は鄙びたりけり

この三月下旬に先生が神宮文庫に調査にお出掛けの旅先から下さつたお葉書は、この一首で結ばれてゐた。併せて、古今集中の先生の愛誦歌を紹介しよう。

春ごとに花のさかりはありなめど相見むことは命なりけり (97番)

先生を語って、その命の水の事に及ばないのは、片手落ちのそしりを如何ともし難い。しかし紙幅も尽きようとしてゐるので、先生が指導教員であつた高柳助手の文言（『学報』315号）の引用で代へる。——助手になって先生がとても上戸でいらっしゃることを知つたが、先生のお酒は楽しいお酒で、酔われるとますます弁舌さわやかに、古い時代のいろいろな思い出話をして下さる。そして最後には、「僕は円タクで帰ります」とおっしゃって一人でお帰りになる。

先生の御健勝を祈って筆を擱く。